

国立公園のレンジャーによる出前授業の事例紹介

半田俊彦（伊勢志摩国立公園管理事務所 アクティブ・レンジャー）

キーワード：伊勢志摩、国立公園、レンジャー、出前授業、コラボ授業、協働、ESD

伊勢志摩国立公園は三重県志摩半島の東部に位置し、伊勢市、鳥羽市、志摩市、南伊勢町にかけて、およそ6万haの広大な面積を占める自然公園である。国立公園は日本を代表する自然の風景地として、自然公園法に基づいて国が指定し管理しており、現在34の国立公園が指定されている。伊勢志摩国立公園は昭和21年11月20日に戦後初の国立公園として指定され、今年で指定73年を迎える。

伊勢志摩国立公園は、ほかの国立公園に比べると民有地の割合が非常に高く（96%以上）、公園内の居住人口も非常に多いことが特徴のひとつである。そのため地域の方たちの生活、歴史、文化、風習などに深く触れることができ、美しい景観を誇るとともに人と自然の関わりを感じさせてくれる国立公園である。一方でその自然を守るには地域の方々の協力が不可欠であり、国立公園としての魅力や価値をいかに伝えていくかが重要となる。

国立公園では、レンジャーと呼ばれる環境省の職員が働いている。国立公園の管理では、大きく「保護」と「利用」の2つのバランスを取ることが大切であり、法律に基づいて開発などに規制をかけて保護する一方で、多くの人に国立公園の自然を楽しんでもらうために様々な取組をおこなっている。なかでも非常勤職員であるアクティブ・レンジャーは、レンジャーの業務を補佐しながら主に野外の現場業務を担当しており、その一つが学校などに出向いて国立公園の自然や地域の生きものなどについて伝える講座、「レンジャー出前授業」である。

通常、施設や行政がおこなう「出前授業」には、食堂の「出前」のように「メニュー」が存在しており、利用者がメニューの中から講座のテーマなどを選んで注文をおこなう。講師はそれを出前先で実施する形式が一般的に想像される。一方、伊勢志摩国立公園におけるレンジャー出前授業では、決まった形式のメニューが存在せず、その講座を依頼する担当の教師と一緒にメニューを考案し、例えば学校の教育課程の一部として、授業を実施していくものを主としている。これを私たちは便宜的に「コラボ授業」と呼んで、平成23年度（2011年度）から取組を開始した。

当初は理科の教師とコラボし、主に学校周辺の身近な自然について四季を通して観察する4年生の理科の単元を利用して、自然観察を通じて地域の自然の特徴や価値に気づき、国立公園やレンジャー活動について知ってもらうことを目的とした。レンジャー活動では、知る（自然や生きものを調べる）、書く（調べてわかったことを記録する）、伝える（自然を守る仲間を増やす）の3つをキーワードにして自然を守っており、レンジャーの授業はこれらを実践しながら展開していった。元々環境省には「子どもパークレンジャー」という小中学生を対象にレンジャー活動を体験するプログラムが存在しているが、これを学校の授業向けにアレンジしたものである。

はじめの数期間は理科の教科書に則して、体験だけでなく知識として事象を学ぶことを優先していたが、平成28年度（2016年度）の取組からは、理科だけでなく総合の時間も活用して「伝える」（調べたことについての情報を発信してたくさんの人に伝え、自然を守る仲間を増やす）ということに重点をおいて授業を実施した。小学校の校庭の樹木について、樹名板と解説文を作ることを目標とし、四季で樹木の調査をしながら、いかに伝えていくかを考えて授業を組み立てていった。

平成29年度（2017年度）の取組では、レンジャーと学校の教師だけでなく、大学の教授と学生、地元の漁師や海女さんなど、多様なステークホルダーとの協働によって6回の授業を展開し、当年度で閉校してしまう小学校において、地域をより好きになり、誇りを持ってもらうことを目指した内容とした。

平成30年度（2018年度）には、小学校の校庭にあり学校のシンボルとなっている大きなクスノキを地域の宝として認識し、持続的に守ることを目標とした授業を実施した。四季のクスノキについて調査した結果をパワーポイントにまとめ、小学生が地域の施設において大人向けに発表する取組を合計6回の授業でおこなった。また、伊勢湾の海岸沿いにある中学校では、総合の時間を利用してレンジャーの授業を学校のESD活動に位置づけ、地域の海岸で減少しているアマモという海藻を4回の授業で調べ、その後実際に種子から苗を育てて学校近くの海岸に移植する取組をおこなった。当年度の「レンジャー出前授業」はのべ31回実施され、対象人数は868人だった。

このような出前授業の中で国立公園のレンジャーが果たす役割は、自然や生物の専門家としてゲストティーチャー的に関わっていたものから、地域の自然を知ってそれを好きになり、自分たちの力で守ろうとする取組を促す役割に変化していった。

学校の授業課程である以上は、教科書で決められた内容を越えた知識を教えることは好ましくないと思われるが、学校のESD活動として位置づけることで、児童の気づきを自由に促し展開していくことが可能となった。また、ここにおいてレンジャーの役割は、本物の自然や生物を見たり触れたりすることで児童の気づきや感動を促すインタープリターとなり、教師はファシリテーターとして働くことで立場を明確化することが出来た。

伊勢志摩地域の小中学校においては、残念ながらESDがほとんど浸透しておらず、その取組をおこなう学校も少ないのが現状である。今後の課題としては、「レンジャー出前授業」を一般的にわかりやすい形で評価し、実績として示せるようにすることである。それによって学校におけるESD活動の効果や重要性を示すとともに、伊勢志摩国立公園の魅力や価値を広く伝え、その保全につなげていくことが出来ると考えている。